

# 平安初期における内親王入内の意義について

中 村 みどり

はじめに

天平宝字元年（七五七）施行の『養老令』繼嗣令・皇兄弟子條（以下『養老令』は『令義解』を参考）には、「凡皇兄弟皇子、皆為<sup>二</sup>親王<sup>一</sup>、女帝子亦同、以外並為<sup>二</sup>諸王<sup>一</sup>、自<sup>二</sup>親王<sup>一</sup>五世雖<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>王名<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>皇親之限<sup>一</sup>」<sup>(1)</sup>とあり、天皇の兄弟・姉妹・子女が親王、または内親王と呼ばれたことが知られる。以後孝謙朝に至るまで、天皇子女は出生と共に無条件で親王・内親王と称されたが、淳仁朝になると親王・内親王宣下が行われるようになり、次第に天皇の子であつても宣下を受けて始めて親王・内親王を称することになる。但し、なおも親王・内親王宣下を受けるのは天皇の兄弟・姉妹・子女を原則とした。従つて、本論で扱う「内親王」も、そうした内親王宣下を受けた一世皇女を指す。

1  
そもそも「内親王」という号は、隋・唐に倣つて律令に採用された「親王」号と違い、日本独自の称号である。「内親王」号の發生に関しては文殊正子氏の説に詳しい<sup>(3)</sup>。即ち、中国でいうところの皇帝の娘・姉妹を指す「公主」が、臣下に嫁ぐことで皇帝と臣下との親密化を図る役割を担っていたのに対して、日本でいうところの天皇の娘・姉妹である「内親王」は、皇族にのみ嫁ぐことで皇室の血の尊貴性を守る役割を担っていたのであり、その役割が異なっている

ことから、我が国では「公主」号を採用せず「内親王」という新たな号を創出したと述べている。公主が「外に向いた性格」であるとするなら、内親王は皇室から皇室へとという「内に向いた性格」を有しているというのである。

事実、内親王は律令において皇親との婚姻しか許されていない。『養老令』継嗣令・王娶親王條では「凡王娶親王、臣娶三世王者聽、唯五世王、不得娶親王」とあり、王は親王（実例より、ここでは即ち内親王を指している）を娶り、臣下は五世以下の王（女王）ならば娶ることができる。但し、五世王は内親王を娶れない。先にあげた皇兄弟子條において五世王は皇親の限りではないと規定されていることから、内親王は四世以内の皇親との婚姻しか認められず、また臣下は皇親に含まれる内親王・女王を娶ることは許されなかった。即ち、内親王を含む皇親女子は、皇室の血の尊貴性を守るために臣下へ嫁ぐことはなく、天皇以下皇親とのみ結婚できたのである<sup>(4)</sup>。

内親王の最大の特徴ともいえるこの婚姻に関しては、安田政彦氏<sup>(5)</sup>、浅尾広良氏<sup>(6)</sup>の研究に詳しく、共に、醍醐三皇女（勤子内親王・雅子内親王・康子内親王）が内親王でありながら令制に背いて藤原師輔と結婚した事例について、降嫁の起こり得た理由と原因の追及を行っている。また後藤祥子氏、稲賀敬二氏、服藤早苗氏などによっても皇女の結婚が論点としてあげられているが、しかし未だ内親王に関する研究は少なく、婚姻に関する先行研究も、内親王と藤原氏との違法な婚姻にのみ終始しているというのが現状である<sup>(8)</sup>。しかもこれら降嫁・婚姻に伴う内親王自身の存在意義については、ほとんど考察されていない。

唯一、石和田京子氏が<sup>(9)</sup>①結婚、②准三后、③養子という点から七〜十一世紀における内親王の役割と意義についての考察を行っており、その意味では評価されるべきものである。しかし石和田氏は、例えば①の結婚について、平安初期より皇女が入内しなくなり族外婚の流れに及んだのは中国の同姓不婚の原則が日本にも浸透したためだと指摘した上で、異母兄弟婚が宇多朝を最後に見られなくなったことを述べているが、宇多朝以後も叔父姪婚は依然として存在して

いるのであり、同姓不婚が浸透していたか、またそれが内親王が入内しなくなった理由と成り得るかは甚だ疑問である（なお皇族には姓は存在しないため、同姓不婚の語は不適当である）。また平安初期から宇多朝に至るまでの約百年間に  
関する考察が脱落していることから、結果的にこの間の具体的な役割や意義が考察されていない点に大きな問題が残る。  
従って平安前・中期は、内親王史において避けては通れない課題点であると考ええる。

平安時代は奈良時代以前に対して親王・内親王の数が急増しており、平安前期は特にその  
処遇と新秩序の形成のため、賜姓、叙位・叙品、任官、経済措置、扶養体制などに関する新  
施策が確立した時期である。内親王に関しても、嵯峨朝において始めて源氏賜姓される者が  
現れるなど、存在形態に重大な変化をもたらしている。これら平安前期の皇親研究は、皇親  
勢力として政事の一端を担う存在としての研究と、皇位継承者として王権を担う存在として  
の研究とがあるが、いずれも考察対象は親王と賜姓源氏に限られており、内親王に関する研  
究はほとんどない。

そこで本論では平安前期を考察範囲とし（中期に関しては別稿を用意する）、内親王が  
担った役割が何であったのか、どのような意義を持ったのかについて明らかにすることを目  
的とする。特に、奈良時代には絶えていた内親王の入内が光仁朝から淳和朝の平安初期に  
限って再発し、仁明朝以後再び中絶する過程は、内親王の平安前期における大きな特色であ  
ると言える（表1参照）。従って、入内再発の過程と中絶に至るまでの経緯、その間におけ  
る入内の意義についての考察を行うこととする。

なお光仁（淳和朝の入内は全部で七例あり、内三例は、①即位前の白壁王（光仁）に入侍

（表1）内親王の入内者数

清和	文徳	仁明	淳和	嵯峨	平城	桓武	光仁	称徳	淳仁	孝謙	聖武	元正	元明	文武	持統	天武
0	0	0	2	1	2	1	1	／	0	／	0	／	／	0	／	4
堀河	白河	後三条	後冷泉	後朱雀	後一条	三条	一条	花山	円融	冷泉	村上	朱雀	醍醐	宇多	光孝	陽成
1	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	1

していた県犬養氏を母とする井上内親王、②桓武天皇に入内した井上内親王所生の酒人内親王<sup>⑩</sup>、③平城天皇に入内した酒人内親王所生の朝原内親王、という母子三代に渡って入内した極めて特殊な事例である。

その入内の経緯と担った役割は瀧浪貞子氏の説に詳しく、他の四例とは明らかに違った意図のもとで行われていることが知られる<sup>⑪</sup>。従って本論ではこの三内親王については踏みこまず、他の四例を中心として考察していく。

## 一 内親王入内に関する変遷

はじめに、平安初期における内親王の入内を論じるにあたって、前後の時期についての特徴を述べておく。平安初期以前の内親王の入内に関する流れは以下の通りである。

①天武朝以前——皇女が入内し立后・国母となる

②文武・淳仁朝（奈良時代）——内親王の入内がない期間

③光仁朝以後——井上内親王に始まる入内の再開

対して平安初期以後の入内に関する流れは以下の通りである。

④陽成上皇・醍醐天皇への単発的な内親王の入内

⑤冷泉朝以後——藤原氏を生母とし、藤原氏に養育、或いは後見された内親王の入内

以上を踏まえて、第一節に平安初期以前、第二節に平安初期の入内中絶以後について述べていく。

### 1 平安初期以前

飛鳥・奈良時代と平安時代の皇女に関する相違点は、立后―国母となるか否か、並びに女帝の有無である。

栗原弘氏によると、皇族の近親婚が集中している五世紀の仁徳朝にはすでに、皇女が皇族以外と結婚することを忌避するための規制があったという。<sup>(12)</sup> 従って六世紀の敏達朝以前には、皇女は入内し、立后、国母となるのが常となっていた。敏達朝以後、七世紀の天智朝にかけては、生母が蘇我氏や女王となる例が増えるが、しかし依然として皇女の入内は継続している。また次の天武朝にも多くの皇女の入内が見られ、特に天智系皇女との近親婚を行っている。このように、飛鳥時代以前には皇女の入内が複数実現しており、さらに一世皇女（後の内親王に相当）所生の皇子が優先的に皇位を継ぐ資格を持ったことは、河内祥輔氏などによって指摘されている通りである。<sup>(13)</sup>

また奈良時代、天平宝字元年（七五七）施行の『養老令』後宮職員令には後宮におけるキサキの員数と位が規定されており、これによると妃は定員二名、四品以上。夫人は三名、三位以上。嬪は四名、五位以上である。品位は皇親のみ与えられる位であるから、妃には皇女しかなれなかったことが分かる。令には皇后に関する規定はないが、皇后とは即ち天皇の正妻であるから、妃より上位にあるべきである。従って皇后もまた皇女にのみ許された位であり、これは奈良時代以前における皇女の特質ともいえるであろう。そしてこれらの皇女は、入内した後、そのほとんどが皇后に立てられ、皇后宮殿において独自の財政基盤を築き、皇后宮職を運営していた。皇太子の幼年時など皇位が潤滑に継承されない際に女帝が立ち得たのも、こうした基盤を持ち得たためである。

例えば、鸕野讃良皇女もまた天武天皇に入内して皇后となっており、さらにその後、持統天皇として即位した。

『日本書紀』持統天皇即位前紀には、即位前の皇后としての役割と職権が記されており、「（天武）二年、立為「皇后」、皇后從<sub>レ</sub>始迄<sub>レ</sub>今、佐<sub>二</sub>天皇<sub>一</sub>定<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、每於<sub>二</sub>侍執之際<sub>一</sub>、輒言及<sub>二</sub>政事<sub>一</sub>、多<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>毘補<sub>一</sub>」とあって、天皇を助け天下を安定させ、政事面においても多くを輔弼していたことが知られる。さらに天武天皇は病に伏せると天下の事は大小を問わず、悉く皇后・皇太子に啓せしめるよう述べており、皇后が天皇の正妻に留まらず、国政上において大きな権力を持つ

ていたことが分かる。このように飛鳥時代においては皇后が天皇と政務を分担し、共同統治していたことは服藤早苗氏などによっても指摘されているところである。<sup>14)</sup>

以上のように、天武朝以前における皇女には、入内し、皇后となる役割があり、天皇の政治を輔弼し女帝として立ち得る条件を持っていたのである。

しかし奈良時代に至り藤原不比等の功によつて急速に藤原氏が台頭してくると、ついに藤原氏を生母とする聖武天皇が即位する。

臣下の女が入内し天皇生母になるといった先例はそれ以前から存在しており、一見前時代の蘇我氏の外戚政策と似通った印象を受ける。しかし藤原氏の外戚政策の最大の特徴は、同時に有力な内親王や王女が入内していないところである。(表2、並びに皇妃一覧参照)

例えば、文武天皇には藤原不比等の女・宮子の他に石川刀自娘、紀竈門娘の二名がキサキとして確認できるが、いずれも宮子が夫人であるのに対して嬪であり、しかも後に「貶三石川紀二嬪號、不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>稱<sub>レ</sub>嬪、」とあるように、嬪号を剥奪されている(『続日本紀』和銅六年十一月五日条)。この廢嬪も、そして宮子所生の首皇子(聖武)が即位し得たのも、文武天皇に宮子以上の有力な妃(皇女)が入内していなかったからである。

また聖武天皇も同じく皇女を娶っておらず、その後宮は藤原安宿媛を筆頭に、県犬養広刀自と橘古那加智、後に藤原武智麻呂女、藤原房前女などが見られる限りである。その上藤原氏は、安宿媛所生の皇子女に皇位を継がせるため、強引に安宿媛の立后を企てているのである(『続日本紀』天平元年八月十日条)。

以上の藤原氏の外戚政策に端を発し、奈良時代には二つの変化がもたらされた。

一つは、宮子所生の首皇子を確実に即位させるために、未婚の女帝を即位させたことである。皇后でも皇太子生母で

もなく、皇后宮職のような基盤も持ちえない未婚の女帝・元正天皇の即位は、即ち、持統天皇に見られたような強い権力を有していない、中継ぎとしての女帝の誕生を意味している。

そしてもう一つが安宿媛の立后である。臣下の女が昇り得る夫人の位を超越して強行されたこの立后は、皇女のみが立后し得るというそれまでの原則を瓦解することになったのである。

いずれも、夫人の立后を阻む妃（皇后）となり即位し得る皇女が入内していなかったことが要因である。即ち藤原氏の外戚政策が、この奈良時代の皇女入内の中絶を引き起こしたのだと言えよう。

しかし結果として安宿媛が皇子を生まなかったために、藤原氏の外戚政策は早くも頓挫する。安宿媛所生の阿倍内親王が孝謙天皇として即位したものの、未婚の女帝であったために皇統を「継ぐ」ことはできず、この草壁系による父子直系相承は断絶するのである。

そこで孝謙（称徳）天皇が冊立したのが、異母姉・井上内親王を妻としていた白壁王（光仁）である。

井上内親王は後に藤原氏の山部親王（桓武）擁立の動きに巻き込まれて廃妃、所生の他戸親王も廃太子されることとなるが、しかし光仁天皇即位時には、前の聖武系皇統と新たな天智系皇統を「繋ぐ」役割を期待され、再び内親王が入内することの意義を見出されたのである。そしてこれが、井上内親王、酒人内親王、朝原内親王という母子三代に渡る県犬養系内親王の入内へと繋がった。

更に桓武朝に至っては、藤原氏族内での勢力争いと人員不足によって、外戚政策のための藤原氏子女の入内が困難となったため<sup>15)</sup>、桓武天皇の専制政治と皇統強化の構想を引き起こし、再び内親王の入内が見られるようになるのである。

## 2 平安初期・入内中絶以後

皇犬養系三内親王並びに淳和朝までの四内親王の入内の後、仁明朝以後、内親王の入内は再び中絶期を迎える。再度継続して見られ始めるのは冷泉朝以後だが、しかしそれ以前にも単発的ではあるが、陽成上皇、醍醐天皇に入内している事例が見られる。

しかしこの内、光孝皇女・綏子内親王が陽成上皇へ入内した例は、陽成天皇退位後の事例であり、仁明天皇以後父子相承されてきた皇位系統を逸して即位した光孝天皇の皇女が入侍したものであるため、例外的であるといえるであろう。<sup>16</sup>これに対して宇多天皇同母妹・為子内親王が醍醐天皇へ入内した例は、一世源氏から思いがけず皇籍に復して即位した宇多天皇が、同じく源氏から復籍した男・醍醐天皇の不安定な皇権を強固とし、更には天皇親政を意図して実現させたものである。

これは明らかに天皇家側の意図によって成立した入内であり、無視できない一例であるが、しかし皇権の不安定時に突発的に起こった例外であったことは確かであろう。

この二例を例外とするならば、冷泉朝に再び内親王が入内するまで、天皇九代に亘って入内は中絶していたことになる。

かといって冷泉朝以後見られるようになる内親王の入内が、平安初期と同様の意図を持っていたと考えるのは短絡的である。

冷泉朝以後の内親王入内の特徴としては、入内する内親王がいずれも藤原氏を生母とする、或いは藤原氏の後見を受けた内親王であったことである。<sup>17</sup>

仁明朝以後、后妃の数が減少傾向にあったのに対し、藤原氏の女の入内率は増加しており、特に村上朝以後はほぼ藤



原氏の独占状態となる。当然天皇生母も藤原氏であり、所生の皇子女も藤原氏を外戚とするものが大半を占めるのである。(表2参照)

この天皇と藤原氏の度重なる婚姻は、天皇と遠縁の皇親より、天皇と藤原氏との血縁の方が濃くなったことをも意味しており、冷泉く堀河朝までの内親王入内の六例中五例までもが、藤原氏を外戚とする内親王の入内である。唯一藤原氏を生母としない冷泉皇后・昌子内親王も、生母を藤原氏とする朱雀天皇を父に、保明親王(母は藤原氏)と藤原氏女との間に生まれた熙子女王を母とし、藤原氏の後見を受けて養育されている。

即ち、冷泉朝以後の内親王の入内は、平安初期に見られた天皇家側の意図による入内に対して、藤原氏の後見を受けた、藤原氏の意図による入内であり、まったく意を異にするのである。

以上のように一、二の例外はあったものの、平安初期を以て、生母の出自に捉われない、純粹な皇親としての内親王の入内は絶えたのであり、この入内には重大な意義があったと見て良いだろう。

## 二 内親王入内の背景

平安初期の入内している内親王は、県犬養系の三内親王を除いて、桓武皇女が三名、嵯峨皇女が一名の計四名である。前者は平城天皇妃の大宅内親王、嵯峨天皇妃の高津内親王、淳和天皇妃の高志内親王であり、後者は淳和天皇皇后の正子内親王である。他に平城天皇退位後に入侍したと思われる桓武皇女・甘南美内親王、平城皇子・阿保親王に入侍した桓武皇女・伊都内親王の例があるが、前者は退位後の例外的な入内、後者は親王への入侍であるため、今回はいずれも除外した。

注目されるのは、四例中三例が桓武皇女であること、そして淳和天皇に入内した内親王のみ皇后となり、皇太子(恒

貞親王)の生母となっていることである。

ここでは、これら内親王入内の背景と入内の理由を探る。

## 1 桓武・平城朝

藤原式家によつて擁立された桓武天皇は、擁立の立役者であつた藤原良嗣(宝亀八年(七七七)没)・百川(宝亀十年(七七九)没)らを即位前の皇太子時代に失くし、寵臣であつた藤原種継(延暦四年(七八五)没)をも治世の初期に失くす。これら寵臣の死と藤原氏勢力の後退により、桓武天皇は専制王権の確立を目指し、諸王・外戚氏族(和氏、紀氏、管野氏、秋篠氏(土師氏)や百濟王氏等)を優遇するようになったとされる。<sup>18)</sup>

しかし桓武天皇の生母である高野新笠は身分の低い女性であり、延暦元年(七八二)の氷上川継の乱<sup>19)</sup>といった皇権の正統性に対する反発や、早良親王・井上内親王等の怨霊騒動に悩まされることになる。従つて専制政治を行うには、新たな天智系皇統を確立し、皇権と正統性を威儀付ける必要があつた。そこで桓武天皇は、族内婚による血縁の強化と、桓武系(天智系)皇族の再生産を目論んだのである。

例えば、延暦二十年(八〇二)十一月九日、桓武天皇は自身の皇女である大宅・高津・高志内親王に同時に加笄の儀を受けさせると(『日本紀略』)、ほぼ同時に安殿(平城)・神野(嵯峨)・大伴親王(淳和)といった、皇位継承し得る有力な親王達へと配している。

また桓武天皇は、皇女の婚出に関しても大きな改革を行つており、延暦十二年の詔では、それまで律令によつて皇親以外との結婚が認められなかつた皇女に対し、三世女王以下と大臣・良家、二世女王以下と藤原氏の結婚を認めている。即ち、二世・三世の皇親が臣下に接近することを許し準皇族化させたのに対し、桓武天皇の血を引く一世王の格を向上

させ、正統な皇親の範圍を縮小したのである（時に一世王のほとんどが桓武天皇の皇子女であった）。

このように桓武天皇は、先の天武系の血統保持者である浄原王（四世王）や、血筋の遠い皇親の格を落とし、自身の皇子女を優遇、かつ自身の血を引く皇子に自身の血を引く皇女を娶らせることで、新たな桓武系の血を引く皇族の再生産と、ミウチの結束の強化を図っているのである。

この桓武天皇の意図によって三内親王は親王に入侍したのであり、次の平城天皇も朝原、大宅両内親王を妃とするこ  
ととなった。

しかし平城天皇が尚侍・藤原薬子を寵愛したことは周知の通りであり、結果として県犬養系内親王の断絶をもたらす  
など、桓武天皇の政策は踏襲されていない。

## 2 嵯峨朝

一方嵯峨天皇の後宮を見ると、妃に高津内親王がいるものの、弘仁六年（八一五）橘嘉智子立后以前には廃妃されて  
いる。

これは高津内親王所生の皇子・業良親王の精神的な異常（『三代実録』貞観十年正月十一日条<sup>21</sup>）が原因とも言われる  
が、業良親王が嘉智子所生の正良親王（仁明）とほぼ同時期に生まれていることから、意図的に精神の異常を言い立て  
られた可能性も有り得る。しかも業良親王は生母・高津内親王が廃妃されているながら臣籍に降下されることはなく、そ  
れどころか親王宣下を受けている。さらに弘仁六年（八一五）五月廿九日には備前国に荒廃田十九町を賜っていること  
からも（『日本後紀』）、厚遇ではないが、生母が廃妃されていたにしては、決して不遇ではなかったことが窺える。即  
ち、高津内親王の廃妃は非常に不自然な形で行われているのである。

また嵯峨天皇の後宮の特色として、内親王でも先例のある藤原氏でもない、橘氏出身の嘉智子が立后したことがあげられる。

中林隆之氏<sup>(22)</sup>は嵯峨天皇のキサキについて、①桓武天皇の正統な継承者である事を意図した高津内親王・長岡氏の入内、②天武系・その他王族末裔氏族（以下「王氏」と記す）の入内（高階氏・文屋氏・交野女王）、③天武・天智両統の源流たる敏達―舒明系譜に連なる王氏の入内（橘氏・大原氏・甘南備氏）、④非敏達系王氏の入内（多治比氏・当麻氏）という四つの傾向があり、王氏子女の入内が非常に多くみられることを特徴としてあげている。中でも橘美千代―諸兄―奈良麻呂―清友から続く橘氏直系の嘉智子の尊貴性は別格であり、王氏勢力の中核的存在と捉えられていたとし、嘉智子立后の一因としている。

即ち、嵯峨天皇は桓武天皇のような族内婚による血統の強化・尊貴性には拘らず、多くの王氏子女との婚姻により、分離しつつあった王族・王氏との結束を重視したのである。

ゆえに起こり得たのが、高津内親王を廃妃した上での嘉智子立后である。

そして嘉智子を立后するためには、皇后としての条件を備えていた高津内親王を廃妃せねばならなかったのである。<sup>(23)</sup>こうした内親王廃妃の事例を見ると、一見嵯峨朝には内親王入内の意義が薄れていたかのように思われる。しかしこれはあくまで嘉智子立后がより重要視された結果であり、嵯峨天皇が内親王入内を拒んだわけではないことは、次の淳和天皇に、嵯峨天皇が自身の皇女を娶らせていることからわかる。

### 3 淳和朝

桓武天皇のキサキ二十七名、嵯峨天皇のキサキ二十九名に対し、淳和天皇のキサキは十二名と減少し、しかもその

内二名が内親王である。(表2、並びに皇妃一覧参照)

親王時代に入侍したと思われる桓武皇女・高志内親王は、嵯峨朝に入つてすぐの大同四年(八〇九)五月に没している。薨伝によると「三品高志内親王薨、遣使監護喪事、詔贈二品、内親王者、桓武天皇第二女、皇帝同母妹也、天皇尤所鍾愛、配淳和天皇、生三品恒世親王、氏子、有子、貞子内親王、薨時年廿一、」(『日本紀略』大同四年五月七日条)とあつて、高志内親王が嵯峨天皇の同母妹であり、桓武天皇鍾愛の皇女であつたことが知られる。淳和天皇即位の後には皇后を追贈された(『日本紀略』弘仁十四年六月六日条)。

高志内親王所生の恒世王(後に親王)は、弘仁十四年(八二三)淳和天皇踐祚に際し皇太子に立てられるが、これを固辞し、代わつて嵯峨皇子・正良親王(仁明)が立太子する(『日本紀略』弘仁十四年四月十六日条)。その後も嵯峨太上天皇が詔して、「亡妹高志内親王者、下愚之同胞、先帝之愛女也、」とした上で恒世親王を皇太子とするが、やはり淳和天皇によつて固辞されている(『日本紀略』弘仁十四年五月廿八日条)。その立太子―辞退の過程は儒教的な謙遜の美德を表した儀礼的なものであるものの、立太子し得る存在であつたことは生母・高志内親王の出自に影響したものであろう。

しかしこの恒世親王は間もなく、淳和朝の天長三年(八二六)に二十二歳で薨じており、「天皇悲痛、久不視朝、」(『日本紀略』天長三年四月十日条)として死を惜しまれた。

このように高志内親王と恒世親王はいずれも早世であつたが、同じく淳和天皇のキサキとなつた正子内親王は長寿で、元慶三年(八七九)七十一歳での薨去である。

正子内親王は嵯峨天皇を父、皇后・橘嘉智子を母とし、弘仁元年(八一〇)、正良親王の双子の同母姉(あるいは妹)として生まれた。入内の時期は明確ではないが、所生の恒貞親王が天長二年(八二五)の生まれで、出産時が十六

歳であるから、おそらく淳和天皇の即位前後の十三、四歳の頃に父・嵯峨天皇の意図のもと入内したのだろう。

高志内親王所生の恒世親王が薨じた翌年、正子内親王は天長四年（八二七）二月廿八日に立后する（『日本紀略』）。薨伝によると、「后美姿顔、貞婉有禮度、存母儀之徳、中表則之、」という人柄で、「太上天皇（嵯峨）、太皇太后（嘉智子）、甚鍾愛之、」したという（『三代実録』元慶三年三月廿三日条）。

天長十年（八三三）二月廿八日、仁明天皇が踐祚すると、同卅日には正子内親王所生の恒貞親王が立太子され（『続日本後紀』）、承和九年（八四二）承和の変により廢太子されるまでは、名実ともに時の人であったはずである。

これら入内した内親王が優遇されていたのは、淳和天皇が皇后腹ではない嵯峨天皇の異母弟であったことが理由としてあげられる。

桓武天皇は三人の女の内、尤も高貴で、尤も鍾愛する平城・嵯峨天皇同母妹の高志内親王を、平城・嵯峨天皇とは生母の異なる夫人腹の淳和天皇に娶らせている。これは兄弟による皇位継承を意図した上で、正統性の劣る淳和天皇の血筋を高志内親王の血筋を以て正統化しようとしたものであったと言えるだろう。同じく正子内親王も、仁明天皇と同母、皇后腹という尊貴性を担って淳和天皇に入内したのであり、その皇権を威儀付ける一助となったに違いない。

しかしこれら内親王の入内が、淳和天皇の皇権を権威付けるためだけのものではなかったことが、正子内親王の入内が嵯峨上皇の斡旋であったということ、そしてこの平安初期に見られる特異な皇位継承法から言える。

#### 4 皇位継承法と内親王

平安初期の皇位継承における特色は、父子ではなく兄弟、あるいは伯父甥、従兄弟間で立太子―即位を行っているところにある。

桓武天皇はじめ弟の早良親王を皇太子とし、次の平城天皇もまた弟の神野親王（嵯峨）を。嵯峨天皇はじめは兄の平城上皇の子である高岳親王を立太子し、廢太子後は弟の大伴親王（淳和）を。淳和天皇は嵯峨上皇の子である甥の正良親王（仁明）を、仁明天皇は淳和上皇の子である従弟の恒貞親王を立太子しているのである。

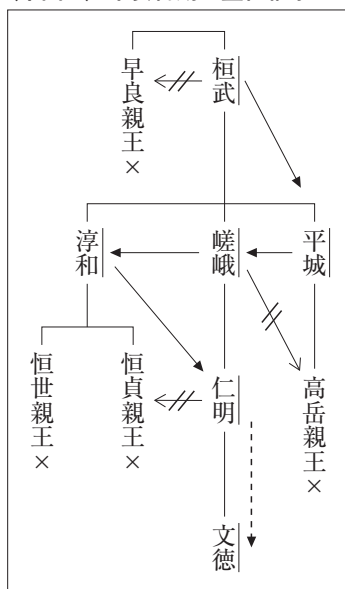
早良親王、高岳親王、恒貞親王など廢太子が相次いだことも特徴的であるが、このように皇位の継承が複雑化したのは、葉子の変に伴う平城上皇との軋轢を経た嵯峨天皇が、讓位の一般化に伴って見出した新たな皇位継承法（オジ甥相承）ゆえである<sup>(25)</sup>と、瀧浪貞子氏は述べている。即ち、讓位制に基づく皇位継承法を円滑に運用するために、しかるべき「次々代の継承者」（次代の天皇の皇太子）をも定める意図で、こうしたオジから甥への皇位継承法を行い、讓位による皇権の安定化を目指したのである。

従って、嵯峨上皇が女・正子内親王を弟・淳和天皇に入内させたことは、族内婚を重視しなかった嵯峨天皇の方針と一見矛盾するように思えるが、この淳和系と嵯峨系の二系統が迭立する皇位継承法を構想していたとするならば、まさに両系統の紐帯を強固にするために意図されたものであったと言える。

もともと内親王の入内はこの正子内親王を最後に途絶している<sup>(26)</sup>のであり、仁明天皇や恒貞親王に内親王が入内した様子は見られない。

淳和上皇の皇女が仁明天皇に配されなかった理由として春名宏明氏は、嵯峨上皇は淳和天皇との融合に力を尽くしたが、淳和天皇があくまでそれを拒否したためであるとしているが、<sup>(26)</sup>

（系図1）平安初期の皇位継承



しかし嵯峨上皇、淳和天皇の関係如何に関係なく、そもそも淳和天皇への内親王入内は単発的な紐帯のための入内であり、桓武朝に見られたような永続的な族内婚によるミウチ政策と専制王権を意識したものではない。また嵯峨上皇の意図した新たな皇位継承法は、「嵯峨―嘉智子」の血統が最も正統な血筋であるという前提を孕んでいるのであり、正子内親王を介してこの血筋を取り入れた恒貞親王にも、勿論仁明天皇にも、もはや内親王を妃として正統性を強化せねばならない理由はなかったのである。

そして単発的であったからこそ、入内する内親王の尊貴性は別格となり、皇権を威儀付け得る程の効力を有したのではないだろうか。

このように、恒貞親王の正統性は母・正子内親王を介して付与された。即ち、正子内親王は嵯峨系・淳和系両統を結ぶ仲介者となるために、入内したのである。

### 三 内親王入内の役割とその意義

以上のように、平安初期に見られた内親王の入内は、桓武の族内婚によるミウチ強化の方針と、嵯峨上皇による新たな皇位継承法における二系統の仲介を理由として実現したことを述べてきた。特に後者に関しては、内親王なくして起り得なかった事例である。

では、嵯峨系・淳和系両系統の仲介として行われたこの入内において、内親王が担った役割とその意義とは何であったのかを、この第三章で述べてゆく。



## 1 内親王入内の役割

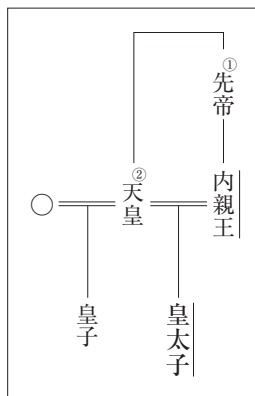
そもそも飛鳥時代には、内親王の入内が立后―国母へと直結していたことを第一章で述べた。皇女は入内することで皇太子を生む役割と、天皇の政務を輔弼する役割を持っていたのである。この役割は奈良時代にかけて喪失したが、しかし皇統と皇統を結びつけ、皇子に王権をもたらすことのできる尊貴な身分を有していた。

正子内親王の入内も、先帝の内親王が天皇に入内して皇太子を生むという形に関しては、こうした旧例と一致する。但し、飛鳥時代には讓位制が存在していなかったため、皇女が天皇に入内した時にはすでに皇女の父天皇や兄天皇が崩じているのが主であり、妃となる皇女を介して先帝と現帝を結びつける必要はなかった。皇女は、皇太子と現帝という父子を結びつける存在であったのである（系図2）。

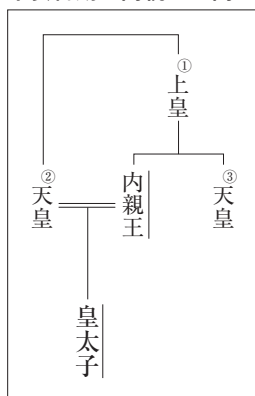
しかし正子内親王の事例では讓位を前提としているため、内親王入内時には父・嵯峨上皇や兄・仁明天皇がまだ生存している。よって正子内親王の果たした役割は、こうした父や兄の外戚系統と、夫方に存在する皇太子の父系系統とを、先帝の皇女としての血筋（母系）によって繋ぐことであった（系図3）。

即ち、同じ繋ぐ役割であっても、正子内親王の入内は正統性の付与に留まらず、生存している上皇と天皇、上皇と外孫（外甥）となる皇太子とを先帝の血筋という立場から繋ぐという、新たな皇位継承法によって創出された、新たな役割であったと言える。

（系図2）  
飛鳥時代の内親王入内



（系図3）  
平安初期の内親王入内



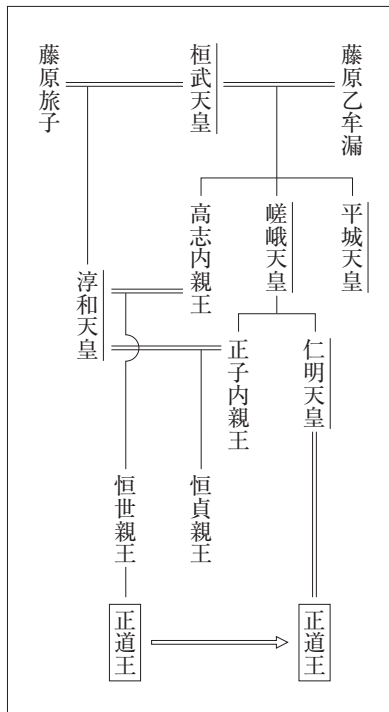
では、母内親王を介することで、所生の皇子が外戚となる母方の祖父上皇や伯父天皇と血縁的な紐帯を結び得たのか。内親王を介することで、嵯峨系・淳和系の両系統が、親密な関係と成り得たのか。

これは、高志内親王所生の恒世親王皇子・正道王と、高志内親王の甥・仁明天皇との関係から考察することができる。早い段階から大伴親王（淳和）に入侍していた高志内親王は、大同四年（八〇九）に薨去している。同じく恒世親王も天長三年（八二六）に薨去しており、この時所生の正道王はまだ五歳であった。

正道王は、「故中務卿三品恒世親王之子、而後太上天皇之孫也、後太上天皇殊鍾愛、令天皇為<sub>レ</sub>子、毎陪<sub>三</sub>殿上<sub>二</sub>、」（『続日本後紀』承和四年八月廿六日条）、「縁<sub>二</sub>後太上天皇之付属<sub>一</sub>、今帝亦鍾<sub>三</sub>寵愛<sub>二</sub>、」（『同』承和八年六月十一日条）とあるように、祖父・淳和上皇（後太上天皇）や祖母の甥・仁明天皇（今帝）に鍾愛され、また仁明天皇（天皇）の子となり、いつも天皇の傍に陪侍していた。要するに、正道王は父系にあたる淳和天皇だけでなく、祖母・高志内親王方の親族となる仁明天皇との間に、鍾愛されるだけの関わりと、養子になるだけの近親意識があったということである。

これは、恒世親王家が母系家族との繋がりを持っていたことを明らかとしており、よって恒世親王の異母弟である恒貞親王もまた、嵯峨上皇、仁明天皇と濃い外戚関係にあったはずである。

即ち、淳和皇子である恒貞親王は淳和天皇の系統に属しているが、外祖父・嵯峨上皇や外伯父・仁明



天皇との近親意識を持ち得、両系統に密接に関わる存在であった。そしてそれは、恒貞親王を両系統の融合した正統な皇位継承者とした母・正子内親王が、新たな讓位制において、上皇（天皇）と皇太子との関係を築くための媒介としての役割を担ったために実現したのだと言えよう。

内親王は、二系統が迭立する新たな皇位継承法において、皇位を共有する二つの系統と系統を繋ぎ、潤滑に皇位を継承するための紐帯を築く媒介としての役割を果たしていたのである。

## 2 内親王入内の意義

では、以上述べてきたような内親王の「皇位の系統と系統を繋ぎ紐帯を図る」という役割が、どのような意義を持ったのか。その意義がどのように活用されたのか。

そもそもこの正子内親王の入内は、前の皇位と次の皇位を繋ぐ必要のない状況、即ち嵯峨上皇の意図した新たな皇位継承法（オジ甥相承）があつてはじめて意味を持つものである。しかし、承和九年（八四二）に起きた承和の変を機に恒貞親王は廃太子されており、結果的にオジ甥相承は瓦解しているのである。

承和の変とは、承和九年の嵯峨上皇の崩御を機として起きた、恒貞親王・廃太子と仁明皇子・道康親王（文徳）立太子を目的とした政変である。

承和九年七月十五日、オジ甥相承の提唱者である嵯峨上皇が崩御すると、そのわずか二日後の十七日、阿保親王から嵯峨皇后橘嘉智子へ、伴健岑・橘逸勢らが恒貞親王を奉じて国家を傾けようと謀っているという密告がもたらされた（『続日本後紀』承和九年七月十七日条）。その旨を更に伝奏された藤原北家の良房が仁明天皇へと上奏し、恒貞親王の廃太子と（同七月廿四日条）、恒貞親王の外戚に当たる橘氏の永名、真直、清蔭らが左遷、並びに良房と対立関係に

あつた式家の愛発らをはじめとする東宮関係者二十八名が処断された（同七月廿六日条）事件である。通説では承和の変は、藤原良房が伴氏ら旧豪族の打倒を策謀して引き起こしたとされている。

あるいは福井俊彦氏、神谷正昌氏らは、恒貞派官人と仁明派官人との対立が発端であるとしている<sup>(28)</sup>。

両氏は淳和朝に藩屏の旧臣（天皇の東宮時代からその藩屏として仕えていた者<sup>(29)</sup>）が多く登用され急速に昇進しているのに対し、仁明朝の官人が良吏や嵯峨上皇の関係者に集中しているという官吏登用の傾向の違いを指摘した上で、承和の変は淳和派の恒貞親王が即位することで、恒貞派の藩屏の旧臣勢力が拡大する可能性を危惧した仁明派官人が引き起こしたものだとする。

即ち、藤原吉野・近主ら藤原式家勢力と北家楓麻呂流の貞守と、女を恒貞親王に入侍させている愛発とその子の亮直<sup>(30)</sup>、南家の岑人、秋常らといった淳和―恒貞派の官人と、嵯峨天皇の女・源潔姫の降嫁を受けるほどの優遇をされていた藤原良房<sup>(31)</sup>をはじめとする、北家の冬嗣や総継、それに南家三守らの嵯峨―仁明派官人とが対立した結果起こったとするのである。

実際に、承和の変を機に藤原氏は他氏排斥に成功し、また氏族内での抗争に決着をつけ、北家が台頭。外甥・道康親王の立太子という外戚政策にも成功したことで、藤原氏は勢力の一本化を果たしたのである。

この藤原北家勢力の台頭と外戚政策の成功が、ひいてはオジ甥相承の瓦解へと繋がった。

もしも嵯峨上皇が意図したままに淳和―仁明―恒貞―文徳と皇位が継承されていたならば、間もなく疎遠となった血縁を結びつけるために、再び内親王の入内が起こり得たであろう。しかし仁明―文徳以後、父子直系の皇位継承法が定着したことで、系統の違う上皇と天皇とを繋ぎ、傍流の皇権を威儀付けてバランスをとるような内親王の役割は必要とされなくなつたのである。

しかも内親王はもとより、入内することで立后―国母と成り得る存在であった。かつて奈良時代の藤原氏の台頭期に、文武天皇や聖武天皇がキサキとして内親王を娶らなかつたように、内親王の入内は外戚政策を狙う臣下にとっては弊害となるのである。

従って、仁明朝以後内親王の入内が見られなくなったということは、即ち内親王の入内が藤原氏にとって脅威と成り得たことを意味する。

それは先の嵯峨系・淳和系の二系統が迭立する状態において、内親王を介することで皇権が譲渡されたためであり、即ち高志・正子内親王の入内は、共に皇権の所在において脅威と成り得るほどの重大な意義を持っていたと言えるのではないだろうか。

### おわりに

以上、平安初期における内親王入内の役割と意義について考察してきたが、これによって、内親王の入内が一貫した理由のもとに行われたものではなく、また飛鳥時代以前に見られた内親王の入内とも意義が異なることが明らかとなった。

飛鳥時代までの内親王は、恒常的に天皇に入内し、立后、国母になるという役割を担ってきたが、奈良時代に至って藤原氏の外戚政策を機に入内を阻まれたことで、入内という役割を一時的に喪失する。更に藤原安宿媛の立后により、内親王のみが皇后に立ち得るという原則をも瓦解されることになった。

しかし皇統を継がない女帝・孝謙天皇（称徳）の即位により草壁皇統は断絶し、皇位の父子直系相承、並びに藤原氏の外戚政策も途絶することになる。これによって、井上内親王を妃とする光仁天皇の即位が実現し、再び内親王は入内

して「皇統を繋ぐ」という役割を担うことになった。これをきっかけに、淳和皇后・正子内親王に至るまで七名の内親王が入内する。

しかし井上内親王に見られた「皇統を繋ぐ」役割は、以後の内親王の入内には見られず、それぞれ、①桓武天皇の意図したミウチ強化の政策と皇統安泰のため（大宅・高津・高志内親王）と、②嵯峨天皇の意図した新たな皇位継承法に伴う、皇位の系統と系統を繋ぐため（正子内親王）という理由で、入内している。

特に②に関しては、飛鳥時代以前に見られたような天皇と皇太子を繋ぐ「国母」となることに意義を持つ入内ではなく、上皇と天皇と皇太子とを繋ぎ、皇位継承し得る二系統の「紐帯の要」となることに意義を持っていた。即ち、平安初期における内親王は、皇権を譲渡するための仲介者であり、皇権の所在において重大な役割を担っていたのである。

以上のように、本論では入内、特に皇后腹の高志・正子内親王に焦点を当てて考察してきたが、勿論、その他大多数の内親王が存在していたのであって、それを無視することはできない。

今後、平安初期における内親王研究の更なる論点として、①皇親としての内親王の立ち位置、②嵯峨朝における皇女の源氏賜姓、③嵯峨朝の斎院制の創始に伴う内親王の新たな役割の創出という点について考察していくべきであると考えるが、しかし平安初期、皇権の所在において内親王が注目されていたことは明らかであったと言えるのではないだろうか。

## 【註】

(1) 大宝元年(七〇二)施行(文武朝)の『大宝令』も『養老令』とはほぼ同様の内容であったというから、元明朝以後に不改常典(皇位嫡系相承の原則)が持ち出されたことと共に、一世王を二世以下の王と差別化し、特別視する意図があったのだろう。

(2) 淳仁天皇は父が天武皇子・舍人親王であるため、自身は天武天皇の二世王であり、それは淳仁天皇の兄弟・姉妹も同様であった。そのため即位後、親王・内親王ではない自身の兄弟・姉妹・子女に改めて親王・内親王の号を宣下せねばならず、これが先例となつて以後親王・内親王宣下が定着することとなる。この原則は平安時代に至り、天皇の子女が必ずしも皇族には列さず、源氏賜姓による皇室からの離脱や出家といった例が現れるなど、時代によって意味合いを変化させた。

(3) 文殊正子「『内親王』号について―『公主』号との比較―」(『古代文化』三八―一〇、一九八六年)

(4) 以後『続日本紀』慶雲三年二月十六日条の格の皇親範圍の拡大と共に婚姻枠も拡大、『日本紀略』延暦十二年九月十日条の詔により女王の婚姻規制は大幅に緩和されるなど変化するが、いずれも内親王に限っては皇親との婚姻しか許されなかったことに変わりはない。

(5) 安田政彦「醍醐内親王の降嫁と醍醐源氏賜姓」(『続日本紀研究』三七四、二〇〇八年)

(6) 浅尾広良「桐壺皇統の始まり―后腹内親王の入内と降嫁―」(『國學院雜誌』一〇九(二〇)、二〇〇八年)、「皇女の婚姻からみた『源氏物語』」(『京都語文』一七、二〇一〇年) 他

(7) 後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合―」(『源氏物語の史的空間』所収、一九八六年、東京大学出版会)、稲賀敬二「皇女と結婚した中納言兼左衛門督―住吉物語の人物設定とその成立―」(『広島大学文学部紀要』四六、一九八七年)、

服藤早苗編『歴史のなかの皇女たち』（二〇〇二年、小学館）他

（8）但し皆無ではなく、河村政久氏の「昌子内親王の入内と立后をめぐって」（『史叢』一七、一九七三年）や、間接的な研究は若干ながら存在している。しかし内親王は史料上にほとんど現れず、実態を確かめることが難しいため、未だ十分な研究がなされていない。

（9）石和田京子「古代皇女の役割とその意義―摂関期を中心として―」（『聖心女子大学大学院論集』二五、二〇〇三年）

（10）酒人内親王は『本朝皇胤紹運録』において桓武天皇と同母であるとされているものの、同母兄妹の結婚は日本でも固く禁じられており、後に桓武天皇の妃となった酒人内親王が桓武天皇と同母である可能性は低い。また一文字昭子氏は光仁天皇即位に際する皇子女の叙位において、酒人内親王が拔きんでて三品を授けられていること、『日本後紀』逸文に「母贈吉野皇后」と記されていること、『続日本紀』に桓武天皇の母である高野新笠の子として名前が出ていないことの三つを理由に、酒人内親王の生母は井上内親王とするのが妥当であるとしている。従って本論でも酒人内親王は井上内親王の所生とする。（一文字昭子「酒人内親王」（後藤祥子編『王朝文学と斎宮・斎院』所収、二〇〇九年、竹林舎）

（11）瀧浪貞子「伊勢斎王制の創始」（後藤祥子編『王朝文学と斎宮・斎院』所収）。瀧浪氏は井上・酒人・朝原内親王がいずれも伊勢斎宮に卜定されていることに注目している。そもそも井上内親王の母・県犬養広刀自が聖武天皇に入内し得たのは、藤原氏が、藤原安宿媛（光明子）を「皇太子を生むためのキサキ」として入内させたのに対し、広刀自に「斎王を生むためのキサキ」としての役割を求めたという役割分担が存在したためであり、安宿媛を通じて太政官を、広刀自を通じて神祇官を掌握しようとしたためだとしている。そのため、聖武系の血を引き、元斎宮としての尊貴性を担っていた井上内親王を介して光仁天皇の即位が実現し、同じく斎宮を勤めた酒人内親王が、皇権の不安定な桓武天皇へ入内。更に女の朝原内親王も斎宮経験を経て、慣例のように入内している。しかし平城天皇は藤原薬子を寵愛したために



朝原内親王は子に恵まれず、県犬養系内親王の入内は三代で途絶した。

- (12) 栗原弘「皇親女子と臣下の婚姻史―藤原良房と潔姫の結婚の意義の理解のために―」(『名古屋文理大学紀要』二五、二〇〇二年)。子は父系に帰属するため、皇子が臣下の女を娶っても所生の子は皇族に列するが、皇女が臣下に嫁いだ場合は、臣下に皇族の血を引く子が生まれることを意味する。そのため皇族の血の流出を防ぎ尊貴性を保つためにも、皇女の婚出は厳しく制限されていた。

- (13) 河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』(吉川弘文館、一九八六年)

- (14) 服藤早苗『平安王朝社会のジェンダー―家・王権・性愛』(校倉書房、二〇〇五年)

- (15) 野村忠夫氏は、桓武朝後半の藤原氏の勢力衰退は、参議に起用すべき一定の年齢と還暦に達した藤原氏子息の不足が原因であるとし(「桓武朝後半期の一・二の問題―延暦十四年十月八日格を中心に―」(『古代学』一〇、一九六二年)、佐藤宗諱氏もまた藤原氏勢力衰退の原因を、七四〇、五〇年代の出生者の少なさゆえであるとしている(「藤原胤継暗殺事件以後―桓武朝における官人構成の基礎的考察―」(『滋賀大学教育学部紀要』一九、一九六九年)。従って入内し得る女、それを後見できるだけの人材が不足していたことになる。この人的資源の不足が、桓武天皇の専制王権の確立を許した一因であることは間違いないだろう。

- (16) 『二代要記』には同母姉・簡子内親王の割注に「配陽成院、号釣殿宮、」とあり、『本朝皇胤紹運録』には綏子内親王の割注に同文があるが、品位などから見ても陽成上皇の妃となったのは綏子内親王の方であったと思われる。そのため本論でも綏子内親王とした。

- (17) 冷泉天皇に入内した昌子内親王は藤原氏を外戚に持つ父・朱雀天皇を早くに亡くし、同じく早くに父を亡くした母・熙子女王同様、藤原氏に養育されていた皇女である。円融天皇に入内した尊子内親王は冷泉天皇を父とし、藤原懷子を

母とする。後朱雀天皇に入内した禰子内親王は、後に後三条天皇となる皇子を産み、院政期への橋掛りとなったとされているが、しかしやはり母は藤原妍子である。後冷泉天皇に入内した章子内親王、ならびに後三条天皇へ入内した馨子内親王は藤原威子を母とする。また堀河天皇に入内した篤子内親王も、藤原茂子を母としている。加えて後三条天皇を除く以上の天皇はいずれも藤原氏を生母としており、藤原氏と密接な関係にあったといえる。

(18) 高田淳「桓武朝後半期の親王任官について」(『國史學』一二一・一九八三年)、宮永廣美「桓武天皇と外戚―渡来系氏族優遇説の再検討―」(『続日本紀研究』三五二・二〇〇四年)

(19) 氷上川継は天武皇孫・塩焼王の子で、聖武皇女・不破内親王を母としていた。延暦元年閏正月、クーデター未遂によって捕えられ、母共々配流となったが、同二十四年、許されて帰京した。(『続日本紀』延暦元年閏正月一日～十九日条)

(20) 『日本紀略』延暦十二年九月十日条

詔曰、云々、見任大臣良家子孫、許<sub>レ</sub>娶<sub>三</sub>三世已下<sub>一</sub>、但藤原氏者、累代相承、撰<sub>レ</sub>政不<sub>レ</sub>絶、

以此論<sub>レ</sub>之、不<sub>レ</sub>可<sub>三</sub>同等<sub>一</sub>、殊可<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>娶<sub>三</sub>二世已下<sub>一</sub>者、云々、

この条については安田政彦氏の研究に詳しいが(『平安前期の皇親政策』(『平安時代皇親の研究』所収、吉川弘文館、一九九八年)、良家の範囲や、後々に与えた影響に再考察の必要性を感じている。また内親王への影響も考えられるため、今後の課題としたい。

(21) 『三代実録』貞観十年正月十一日条

親王清爽變易、清狂不<sub>レ</sub>慧、心不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>審<sub>三</sub>特質之地<sub>一</sub>、

(22) 中林隆之「嵯峨王権論―婚姻政策と橘嘉智子の立后を手がかりに―」(『市大日本史』一〇・二〇〇七年)

(23) 嘉智子の立后が嵯峨天皇即位から六年もたった弘仁六年七月であったことにも注目できる。その前月に高津内親王所生の嵯峨第一皇女・業子内親王が薨じていることから、業子内親王は弟・業良親王の精神的不安を払拭するだけの存在だったのではないか。ゆえに高津内親王の廃妃も、ともすれば業子内親王の死後、嘉智子立后と多治比高子立妃までの期間に起こったものかもしれない。少なくとも高津内親王は業子内親王生存中、相応の存在感を持っていたのではないだろうか。

(24) 葉子の変は、弘仁元年(八一〇)平城上皇が寵愛する藤原葉子やその兄・仲成と共に平城遷都と復権を目論んだ事件であり、これによって嵯峨天皇は、上皇が天皇の皇権を犯さぬよう、上皇の居所を大内裏外に置くなど、讓位制に関する政策の構想を持った。

(25) 瀧浪貞子「女御・中宮・女院——後宮の再編成」『論集平安文学』三、一九九五年

(26) 春名宏明「平安時代の后位」『東京大学日本史学研究室紀要』四、二〇〇〇年

(27) 仁明天皇と正子内親王は双生児であるため、仁明天皇が兄であったか弟であったかは不明である。但し便宜上、本論では兄と記した。

(28) 福井俊彦「承和の変についての一考察」『日本歴史』二六〇、一九七〇年、神谷正昌「承和の変と応天門の変——平安初期の王権形成——」『史学雑誌』一一一(一一)、二〇〇二年

(29) 福井氏はこれを「藩邸の旧臣」とし、神谷氏もそれに則っているが、「藩邸」では江戸時代等の藩の邸宅を意味してしまふ為、皇室守護、ひいては近臣の意を以て「藩屏」と語を改めた。藩屏という語もまた時代的にはそぐわないが、先行研究に従って便宜使用する。

(30) 『続日本後紀』(承和九年七月廿六日条)には(春宮)大進・藤原高直とあるが、高直という人物は『尊卑文脈』にも

見られず、出生が不明である。そこで、「高」と「亮」が間違えやすい字であること、駿河守という経歴の重複等から、高直は愛発の子である亮直の誤りではないかとする福井氏の指摘に則る（註（28）前掲論文）。

（31）栗原弘氏（註（12）前掲論文）に詳しい。なお潔姫は賜姓し臣下となっているため「降嫁」という語は不適切であるが、便宜上本論では「降嫁」と記した。

(表2) 入内者数内わけ

天皇(親王)	皇女	二世女王	他女王	藤原氏	源氏	他氏族	不明	総数	備考
天武天皇	4			2		3		9	
文武天皇				1		1		2	
聖武天皇				3		2		5	
淳仁天皇						1	1	2	
光仁天皇	1	1		2		4		8	
桓武天皇	1			10		16		27	
平城天皇	3			3		4		10	皇女1は讓位後
嵯峨天皇	1		1	1		26		29	
淳和天皇	2		1	1		7	1	12	
仁明天皇			1	6		6	1	14	
文徳天皇			1	7		8		16	
清和天皇			5	9	5	7		26	
陽成天皇	1	1		1		3		6	皇女は讓位後
光孝天皇		1	3	3		6		13	
宇多天皇			2	6	2	3		13	
醍醐天皇	1		1	8	7		1	18	
(保明親王)				3	1			4	
朱雀天皇		1		1				2	
村上天皇		2		8	1			11	
冷泉天皇	1			3				4	
円融天皇	1			4			1	6	
花山天皇		1		4		2		7	他氏族・平氏
一条天皇				6				6	
三条天皇				5				5	
後一条天皇				1				1	
(敦明親王)				3	1		1	5	
御朱雀天皇	1	1		3				5	女王は藤原氏養女
後冷泉天皇	1			2		1		4	
後三条天皇	1			3	1	1		6	他氏族・平氏
白河天皇				7	4	2	2	15	他氏族・賀茂氏
堀河天皇	1			3	1		1	6	
〈計〉	20	8	15	119	23	103	9	297	

※女王の内、何世か不明の者は「他女王」に含んだ

## 皇妃一覽

天皇 (皇子)	名前	位	父	母	所生の皇子女	備考	享年
天智天皇	蘇我倉山田遠智娘	嬪	蘇我倉山田石川麻呂		持統天皇・建弼皇子・大田皇女		
	蘇我倉山田姪娘	嬪	蘇我倉山田石川麻呂		元明天皇・御名部皇女		
	宅子娘				大友皇子		
	伊良都賣				施基皇子		
	阿倍橘娘	嬪	阿倍倉橋麿		飛香皇子・新田部皇女		
	蘇我常陸娘	嬪	蘇我赤兄		山辺皇女		
	忍海造色夫古娘	宮人	忍海造小龍		大江皇女・川島皇子・泉皇女		
	栗隈首黒姫	宮人	栗隈首徳万		水主皇女		
天武天皇	持統天皇		天智天皇	蘇我倉山田遠智娘	草壁皇子		
	大田皇女	妃	天智天皇	蘇我倉山田姪娘	大来皇女・大津皇子		
	新田部皇女		天智天皇	阿倍橘娘	舍人親王		
	藤原水上媛	夫人	藤原鎌足		但馬皇女		
	大江皇女		天智天皇	忍海造色夫古娘	弓削皇子・長親王		
	藤原五百重媛		藤原鎌足		新田部親王		
	蘇我大蕤媛	夫人	蘇我赤兄		穗積親王・多紀・田形皇女		
	尼子媛		胸形君徳善		高市皇子		
	穴人臣椒媛	宮人	穴人臣大麿		刑部・磯城皇子・訖基皇女		
文武天皇	藤原宮子	夫人	藤原不比等		聖武天皇		
	石川刀自娘	嬪			広成・広世皇子		
	紀竈門娘	嬪					
聖武天皇	藤原安宿媛	皇后	藤原不比等	県犬養三千代	基王・孝謙(称徳)天皇		
	県犬養広刀自	夫人	県犬養唐		井上内親王・安積親王・不破内親王		
	藤原某媛	夫人	藤原武智麻呂	竹野女王(?)			
	藤原某媛	夫人	藤原房前	牟漏女王			
	橘古那可智	夫人	橘佐為				
淳仁天皇	栗田緒姉						
	某女				安倍内親王		
施基皇子	紀橡媛		紀諸人		光仁天皇		
光仁天皇	井上内親王	皇后	聖武天皇	県犬養広刀自	他戸親王・酒人内親王	廃后	
	高野新笠	夫人	高野乙繼		桓武天皇・早良親王・能登内親王		
	藤原曹子	夫人	藤原永手	藤原良繼女か			
	紀宮子	夫人	紀稲手				
	藤原産子		藤原百川か				69
	尾張女王		湯原親王		藤田親王		
	県主島姫		県主毛人		弥努磨内親王		
	県犬養男耳				広根諸勝		

31 平安初期における内親王入内の意義について

恒武天皇	藤原乙牟漏	皇后	藤原良継	阿倍古美奈	平城天皇・嵯峨天皇・高志内親王	贈皇太后	31
	酒入内親王	妃	光仁天皇	井上内親王	朝原内親王		76
	藤原旅子	夫人	藤原百川か	藤原緒姉	淳和天皇	贈妃・贈皇太后	
	藤原吉子	夫人	藤原是公	橘麻通我か	伊予親王		
	多治比真宗	夫人	多治比長野		葛原・佐味・賀陽・大野親王・因幡・安濃内親王		55
	藤原小屎	夫人	藤原鶯取	藤原人数	万多親王		
	紀乙魚	女御					
	百済王教法	女御	百済王俊哲				
	橘常子	女御	橘島田麻呂		大宅内親王		30
	藤原仲子	女御	藤原家依				
	橘御井子	女御	橘入居		賀楽・菅原内親王		
	橘田村子	女御	橘入居		池上内親王	後に藤原良繩の妻	
	藤原正子	女御	藤原清成			藤原種継の姉妹	
	坂上春子		坂上田村麻呂		葛井親王・春日内親王		
	坂上全子		坂上菊田麻呂		高津内親王	田村麻呂の姉妹	
	紀若子		紀船守		明日香内親王		
	藤原上子		藤原小豆麻呂		滋野内親王		
	藤原河子		藤原大継		仲野親王・安勅・大井・紀伊・善原内親王		
	百済王教仁		百済王武鏡		大田親王		
	河上好		錦部連春人		坂本親王		
	藤原東子		藤原種継		甘南美内親王		
	藤原平子		藤原乙叡		伊都内親王（伊豆とも）	南子とするのは誤り	
	中臣豊子		中臣大魚		伊勢内親王		
	百済王貞香		百済王教徳		駿河内親王		
	田治比豊継	女孺			長岡朝臣岡成		
	百済永継	女孺	飛鳥部奈止麻呂		良岑朝臣安世	初め藤原内麻呂の妾	
	因幡国造淨成女	采女	因幡国造清成				
平城天皇	藤原帯子	東宮妃	藤原百川			皇后追贈	
	藤原某女	東宮妃	藤原繩主	藤原薬子			
	朝原内親王	妃	恒武天皇	酒入内親王		後に妃を辞す	39
	大宅内親王	妃	恒武天皇	橘常子		後に妃を辞す	
	藤原薬子	尚侍	藤原種継			初め藤原繩主の妻	
	伊勢継子	宮人	伊勢老人		高岳・巨勢親王・上毛野・石上・大原内親王		41
	葛井藤子（番永藤姫とも）		葛井道依		阿保親王	父は桑田良藤継道とも	
	紀魚貝		紀木津魚		叡努内親王		
	紀某女		紀兼貞				

嵯峨天皇	橘嘉智子	皇后	橘清友	田口某女	仁明天皇・秀良親王・正子・秀子・俊子・繁子・芳子内親王		65
	高津内親王	妃	桓武天皇	坂上全子	業良親王・業子内親王	後に廃妃	
	多治比高子	妃	多治比氏守				39
	藤原緒夏	夫人	藤原内麻呂				
	大原清子	女御	大原家継		仁子内親王		
	百済王貴命	女御	百済王俊哲		基良・忠良親王・基子内親王		
	高階河子		高階淨階		宗子内親王		
	交野女王	宮人	山口王		有智子内親王		
	文屋文子		文屋久我麻呂		純子・斉子内親王		
	秋篠京子	更衣	秋篠安人		源清		
	山田近子	更衣			源啓・源蜜姫		
	飯高宅刀自	更衣			源常・源明		
	百済王慶命	尚侍	百済王教俊		源定・源鎮・源善姫		
	笠継子				源生		
	大原全子				源融・源勳・源盈姫		
	橘春子						
	菅原閑子	掌侍					
	大中臣岑子					後に藤原有統の妾	
	布勢武藏子				源貞姫・源端姫		
	広井某女		広井弟名		源信		
	安倍某女		安倍楊津		源寛		
	田中某女				源澄		
	栗田某女				源安		
	惟良某女				源勝		
	長岡某女		長岡岡成		源賢	父は桓武皇子	
	当麻某女	女孺	当麻治田麻呂		源潔姫・源全姫		
	紀某女				源更姫		
	内蔵影子				源神姫・源容姫・源吾姫		
	甘奈備某女				源声姫		
淳和天皇	高志内親王	東宮妃	桓武天皇	藤原乙牟漏	常世親王・氏子・有子・貞子内親王	贈皇后	31
	正子内親王	皇后	嵯峨天皇	橘嘉智子	恒貞・恒統・基貞親王		71
	橘氏子	女御	橘永名				
	永原原姫	女御					
	緒継女王	尚蔵					61
	藤原潔子	更衣	藤原長岡				
	大中臣安子		大中臣淵魚		良貞親王		
	大野鷹子		大野真雄		寛子内親王		
	橘船子		橘淨野		崇子内親王	橘嘉智子の従姉妹	
	丹墀池子(常子)		丹墀門成		同子内親王(国子とも)		
	清原春子		清原夏野	葛井庭子か	明子内親王		



33 平安初期における内親王入内の意義について

	某女				統忠子		
仁明天皇	藤原順子	女御	藤原冬嗣	藤原美都子	文德天皇	皇太后、太皇太后	64
	藤原沢子	女御	藤原総繼	藤原数子	宗康親王・光孝天皇・ 人康親王・新子内親王	後に贈皇太后	
	滋野繩子	女御	滋野貞主		本康親王・時子・柔子 内親王		
	藤原貞子	女御	藤原三守		成康親王・親子・平子 内親王		
	藤原息子	女御					
	紀種子	更衣	紀名虎		常康親王・真子内親王		
	藤原賀登子	更衣 か	藤原福当麻呂		国康親王		
	小野吉子	更衣 か	小野瀧雄				
	三国某女	更衣			貞朝臣登		
	藤原小童子		藤原道長		重子内親王		
	高宗女王		岡屋王		久子内親王	父は高市皇子の孫	
	百済王永慶	女孺			高子内親王	慶命の妹	
	山口某女				源覚	名は周子か恒子か	
	某女				源効・源冷・源多・源 光	子は同母か否か不明	